

恵心僧都源信と密教

兼 子 鐵 秀

源信は『往生要集』巻頭において

夫往生極樂之教行濁世末代之目足也。道俗貴賤誰不歸者。但顯密教法其文非一。

として「顯密教法」の語を出しているが、以下しばしば「顯密」の語や真言に関する記述がみられる。特に大文第三「極樂証拠」では『千手陀羅尼經』『十一面經』『不空羂索』『如意輪』『隨求』『無垢淨光』『光明(真言)』等の經名を明かしており、源信が往生極樂の教行に密教を加えていることは衆知の事実といえる。

源信の密教観についてはすでに諸師によって『往生要集』『一乗要決』等に密教に関する記述がみられること、及び源信が光明真言を重視していたこと等が指摘されており、さらに『菩提心義要文』では源信が叡山伝統の円密一致の立場に立っている点についても指摘されている。

筆者はここで異説を主張しようとするものではないが、特に従来はあまり研究されていない『菩提心義要文』の内容の検討によって二、三の私見を述べて源信の密教観の一端を明らかにしたいと考える。

二

『菩提心義要文』は『菩提心論』の三門分別(行願・勝義・三摩地)に倣って菩提心に関する要文を集めたものであり、佐藤哲英師によって詳細に検討され、「長徳三年(九九七)九月首楞嚴院沙門源信記」の奥書も信ぜられている貴重な書である。

まず行願門は巻頭部分が欠落しており、現在は五文の引用文しか存在しないが、そのうち『唯識論』の「不執菩薩。有情実情。無由發起猛利悲願」の文及び『十住毘婆沙』偈の「我分是新学。善根未成就心未得自在願後当相與。」の文の二文が『往生要集』大文第四正修念仏第三作願門中の引用文

と一致する。

次に勝義門については全三十の引文のうち十二文が『往生要集』中に引用された文と一致する。以下にそれぞれの引文と『往生要集』の引用箇所を列記してみる。

(1)心地観經觀心品云。三界之中。以心為主。能觀心者。究竟解脫。不能觀者。究竟沈淪。偈云。如是心法本非有。凡夫執迷謂非無。若能觀心。體性空。惑障不生。便解脫。『往生要集』大文第五助念方法第四止惡修善の引文と一致。

(2)莊嚴菩提心經云。若於一切法。無所得。是名得菩提。為始行衆生。故說有菩提。乃至然。是中亦無有心。『往生要集』大文第四正修念仏第三作願門の引文と一致。

(3)占察經云。若有衆生。欲向大乘者。一實境界者。謂衆生心。從本以來。不生不滅。所以者何。一切有心。起分別。者猶如幻化。無有定實。『往生要集』大文第五助念方法第三對治懈怠の引文と一致。

(4)如來密嚴經說。若人父為緣。而害盜三宝物。若有犯有住。無有是處。『往生要集』大文第四正修念仏第三作願門の引文と一致。

(5)思益經云。知一切法非法。知一切衆生非衆生。是名菩薩。發無上菩提心。『往生要集』大文第四正修念仏第三作願門の引文と一致。

(6)又〔淨名經〕云。雖知諸仏國。及與衆生空。而常修淨土教。教化於群生。『往生要集』大文第四正修念仏第三作願門の引文と一

致。

(7)又〔華嚴經〕云。一切諸法中。法門無辺際。成就一切智。入於深法界。『往生要集』大文第五助念方法第三對治懈怠の引文と一致。

(8)大論云。有小因大果小緣大報。如求仏道讀一偈。而行因緣業。亦不失。『往生要集』大文第四正修念仏第五廻向門の引文と一致。

(9)又〔大論〕云。利根者。即知是諸法。皆是法性。譬如神通人。能變瓦石。皆使為金。鈍根者。方便分別求之。乃得法性。譬如大治鼓石。然後得金。『往生要集』大文第四正修念仏第三作願門の引文と一致。

(10)中論偈言。不生亦不滅。不常亦不斷。不一亦不異。不來亦不出。諸法不自生。亦不從他生。不共不無因。是故說無生。『往生要集』大文第五助念方法第四止惡修善の引文と一致。

(11)又〔中論偈〕云。雖空而不斷。雖有而不常。業果報不失。是名仏所說。『往生要集』大文第四正修念仏第三作願門の引文と一致。

(12)又〔中論偈〕云。衆生因緣生法。我說即是空。亦為假名。亦是中道義。未曾有一法。不從因緣生。是故一切法。無不是空者。『往生要集』大文第四正修念仏第三作願門の引文と一致。

(2)の『心地観經』觀心品の引用によつて、『菩提心義要文』の勝義門と觀心との密接な關係が窺える。

又(6)の『維摩經』仏道品偈の引用は、すでに述べたことが

あるが、『往生要集』『菩提心義要文』『阿弥陀経略記』に共通して引用されているものであり、いずれも観心と密接な関連の上から引用されたものである。

この勝義門中の引用文のうち、特に『往生要集』大文第四正修念仏第三作願門の引文と一致するものが一番多く七文を数えることが注目される。

三

『菩提心義要文』の三摩地門については五十六の引用文がみられるが、『往生要集』中には同一引用文を見い出せない。同書三摩地門にはまず初めに『菩提心論』三摩地門全文が引用されている。この文は安然の『菩提心義抄』巻第四及び『真言宗教時義』巻第三にも引用されていたもので、以下十一について、安然の『菩提心義抄』中に引用された文と一致する。次にそれぞれの引文と『菩提心義抄』の引用箇所を列記してみる。

- (1) 心地観経発菩提心品云。文殊師利菩薩曰。如仏所説。：自覺^{サツ}悟^{ブツ}心。能^ス發^{ハス}菩提。此覺悟心即菩提心。(『菩提心義抄』巻第三の引文と一致)
- (2) 又(心地観経発菩提心品)云。凡夫所観菩提心相。猶如^{ナド}清淨円満月輪。…發^{ハス}菩薩地。(『菩提心義抄』巻第四の引文と一致)
- (3) 又(略出経)云。彼月輪者是^{シテ}大福德所成。：既見^ミ智所成月。

恵心僧都源信と密教(兼 子)

〔菩提心義抄〕巻第一及び巻第四の引文と一致

(4) 又(略出経)云。彼言我見^ミ月輪清淨相。(『菩提心義抄』巻第四の引文と一致)

(5) 又同経(略出経)偈云。普賢法身遍^ス一切。：精勤決定^ス金剛。

〔菩提心義抄〕巻第四の引文と一致

(6) 又(守護経)云。此菩提心本無^ス色相。為^{シテ}未成就諸衆生^ノ故説^フ如^シ月輪。(『菩提心義抄』巻第四の引文と一致)

(7) 大蓮花三昧経偈曰。歸命本覺心法身。常住妙法心蓮台。本来莊嚴三身徳。三十七尊住心城。遠離因果法然具。普門塵数諸三昧。無辺徳海本円満。還我頂礼心諸仏。(『菩提心義抄』巻第一の引文と一致)

(8) 密厳経偈云。仏説^ク世間阿頼耶。如^シ金^ノ与^ニ指^ヲ還^ニ展^ニ転^ニ無^ク差別^{ナシ}。

〔菩提心義抄〕巻第四の引文と一致

(9) 起信論云。心法有^ニ二種門。一者心真如門。二者心生滅門。：唯証相応故(『菩提心義抄』巻第五の引文と一致)

(10) 又(起信論)云。心生滅者依^リ如来蔵故。：則為^{シテ}向^ニ仏智^ヲ。

〔菩提心義抄〕巻第五の引文と一致

(11) 又(大日経疏)云。阿字有^ニ三義。謂^フ不生義。空義。有義。(『菩提心義抄』巻第一の引文と一致)

(1) 及び(2)の『心地観経』発菩提心品については以前に述べたことがあるが、『心地観経』は叡山に於て円仁、円珍の引用にはじまり、安然に至って特に巻第八(観心品・発菩提心品・成仏品)の密教義が注目され、円密一致の立場から『菩提

心義抄』に多用されたものであり、就中『心地観経』發菩提心品中の「自覚悟心」の語は、安然—良源—源信—覚超の著作に共通してみられ、且つ源信がこれを『菩提心義要文』の三摩地門に位置づけていることから、源信がこの語を円密一致の三摩地心とみていることは確実であり、直接には師の良源を受けたものであるとしても、安然の影響を強く受けていると考えられる。

『往生要集』では、『心地観経』の卷第八の文は、『菩提心義要文』の勝義門に位置づけられた観心品の引用文と同文の一文のみが本文第五助念方法第四止惡修善の中に引用されているのであるが、安然の『菩提心義抄』卷第一には、『菩提心論』の三門分別を説明して、

所行名_レ行_レ發願_ヲ為_ス願_ニ故名_ニ行願_一止息_ヲ為_ス法_ニ觀_ニ顯勝義_ニ故名_ニ勝義_一梵云_ニ三摩地_一大唐云_ニ等念_一故金剛頂訣云_ニ三昧耶者正翻_ニ為_ス等持_一三摩地者正翻_ニ為_ス等念_一

と述べる中で、勝義については「劣法を止息し勝義を觀顯す」として「止觀」をいうのだとしていることから、源信がこれを受けたとすれば『菩提心義要文』の勝義門は天台の止觀の立場に立った説示であると解釈できるのではなからうか。事実『菩提心義要文』と共通の引用文を多く有する『往生要集』本文第四正修念仏門には天台止觀に説を讀る個所があり、特に「止觀を檢_{かん}よ_え」と結ぶ三諦相即の文を中心に

『淨名』『中論偈』『如来密藏經』を共通して引用していることに注目したい。

(3)の『略出經』は『菩提心義抄』に同文が三回も引用されているが、それぞれ(1)『菩提心論』、(2)『心地観経』、(6)『守護經』等と密接な関連を以って引用されている。

又(7)の『大蓮華三昧經』については『菩提心義抄』卷第一に『心地観経』觀心品の取意である三摩地觀の文と共に引用されているので、『大蓮華三昧經』と三摩地觀の關係も『菩提心義抄』に基くものと考えられる。

又(8)の『密嚴經』は『菩提心義抄』卷第五に(10)の『起信論』の取意文と共に「円密義」として引用されており、安然も『起信論』の同文を三摩地門とみていたようであり、源信はこれを受けていると考えられる。

(11)の『大日經義疏』の『阿字三義』については同文が『菩提心義抄』卷第一に、

又義釈云_ニ阿字_一有三義_ニ謂_ニ不生義空義有義_一故_ニ竜樹云_ニ因縁所生法亦空亦仮亦中也_一故知真言菩提心実相亦即空即仮即中也_ニ

の如く引用されており、源信がこの文を被覽した可能性が強いことから、すでに指摘されている如く、密教的な阿弥陀三諦説についてもこの時点で何らかの示唆を受けていると考えられる。

以上の如く、未だ『菩提心義要文』の全貌を明らかにする

ことはできないが、次の諸点が明らかとなった。

①『菩提心義要文』の行願門と勝義門に引用された引文について、『往生要集』との密接な関連がみられ、特に大文第四正修念仏第三作願門との共通点が多いことが明らかとなった。

②『菩提心義要文』の三摩地門に引用された引文と『往生要集』との関係は全くみい出せないこと。

③『菩提心義要文』の三摩地門は、安然の『菩提心義抄』の影響を強く受けていると考えられること。等である。

『菩提心義要文』という書名について、佐藤哲英師は潜真の『菩提心義』を重視した、安然の『菩提心義抄』をうけついでものと考えられることを指摘されているが、内容的にも安然の円密一致の菩提心を受容していることが確認されたことから、今後、源信教学における密教の位置づけについてもさらに考察を進める必要があると思われる。

- 1 恵心僧都全集・第一・一頁
- 2 同六四頁・六六頁・六九頁・二二一頁
- 3 同七三頁・一五三頁・一五六頁
- 4 同六四頁
- 5 八木吳恵『恵心教学の基礎的研究』
- 石田瑞磨『日本思想大系・源信』
- 和田悌一「源信における密教受容について」(『印仏研究』2012)
- 6 佐藤哲英「新出の源信記『菩提心義要文』の研究」(竜谷大

恵心僧都源信と密教(兼子)

学仏教文化研究所紀要第七集

武寛超『往生要集研究』所収論文「天台からみた『往生要集』」

7 佐藤哲英(既出論文)

8 拙稿「源信と『維摩經・仏道品偈』(『天台学報』第二十九号)のことは、行願・勝義二門に於て14の引用文が『往生要集』と一致することと対照的である。

9 大正蔵七五・五二七b~c

10 大正蔵七五・四九七c

11 同 五一六a

12 同 四六九a、五一六b、五二〇c

13 同 五二〇c

14 同 五二七c

15 同 五一六a

16 同 四七〇c

17 同 五三八b

18 同 五三八a

19 同 五三八b

20 同 四六〇a

21 拙稿「良源撰『九品往生義』における菩提心説」(『印仏研究』32-1)

22 安然『菩提心義抄』、良源『九品往生義』、源信『菩提心義抄』、寛超『五相成身私記』

23 大正蔵七五・四五九a

24 同 四六〇a

25 末木文美士「阿弥陀三諦説をめぐって」(『印仏研究』28-1)

26 △キーワード▽『菩提心義要文』、源信、三摩地門、円密一致(叡山学院講師)